藤川百首

周桂抄

伊地知文庫
文庫20
277

伊地知氏書冊

藤川百首

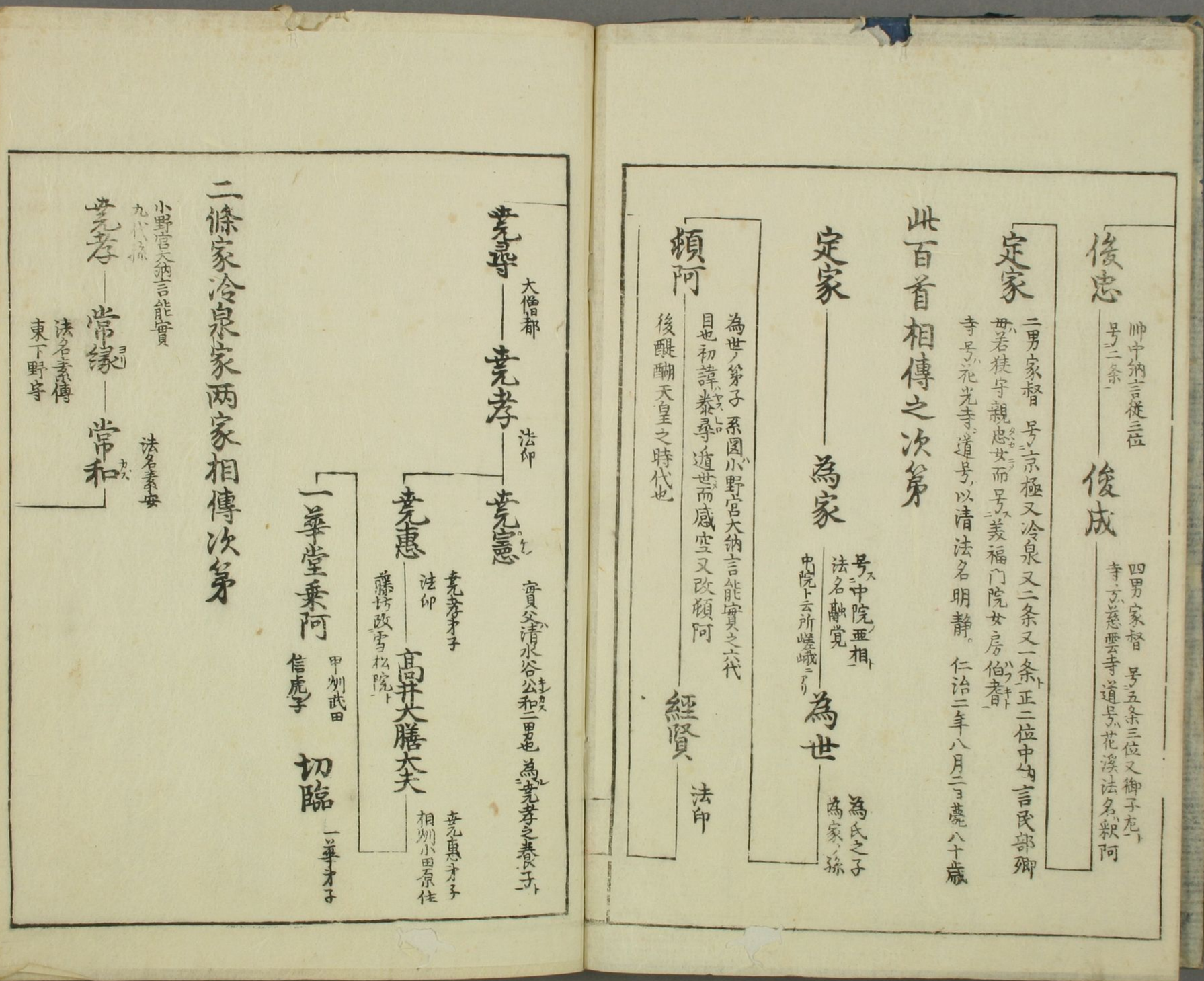
以巻頭為題號和漢典籍此例多或號四文字題百首或號難題百首宗頂抄云此百首を結題百首と号し結題とハ題一乃中に二章に合せられハなり

美濃國不破郡府郡也不破関と云あり此関を今の世よ関原と云此所西方関の藤川と云あり日本にて三関と云ハ相坂と鈴鹿郡と不破と名高き所あり

道長 御堂関白

長家 六男号御子左家又号三条 母高明公女

忠家 大内言正二位


俊忠
帥中納言従三位
号二条一
俊成
四男家督 号五条三位又御子左ト
寺ト云慈悲寺道号花溪法名釈阿
定家
二男家督 号京極又冷泉又二条又一条ト正二位中納言民部卿
母ハ若狭守親忠女ト而号ス二美福門院女房伯耆ト
寺号ハ花光寺道号以清法名明静。仁治二年八月二日薨八十歳
此百首相傳之次第
定家
為家
号ス二中院亜相ト
法名融覚
中院ト云所嵯峨ニアリ
為世
為氏之子
為家ノ孫
頓阿
為世ノ弟子 系図小野宮大納言能実之六代
目也初諱叡尋遁世而感空又改頓阿
後醍醐天皇之時代也
経賢
法印
尭孝
大僧都
尭孝
法印
尭憲
実父清水谷公和二男也為尭孝之養子ト
尭恵
尭孝才子
法印
藤原政雪松院ト
高井大膳大夫
尭恵才子
相州小田原住
一華堂乗阿
甲州武田
信虎子
切臨
一華才子
二條家冷泉家両家相傳次第
小野宮大納言能実
九代孫
尭孝
常縁
常和
法名素安
法名素傳
東下野守

大納言
号下冷泉

持為 ― 孝範 ― 女

従五位上参河守
木戸
持為才子

正吉母

俗名大膳大夫紀貫 伊豆守忠朝
木戸
常春才子

正吉 ― 賢哲 ― 休波

木戸
元有

正吉ノ藤川百首抄ニ弘治三年七月廿八日トアリ弘治三年ヨリ慶安二年ニテ九十三年也

関路早春　春二十首

拾遺集よ三春とよめるハ正二三月と云立春といふハ正月の節ハ日をいふなり初春とハ云ハ元日より三十日乃間を云但奇よハ元日とよめる多く六日迄をよめるもあり

初春　今年春来ぬ　春毎の関路

春の来る夜ハ明ぬ今朝吹ハ氷とけん

初春　拾遺集三春ノ部ニ入　紀友則

水の面よあや吹ふくる風や沈の氷を今日いとくらん

早春と云ハ元日より六日まてをよめる奇なり六日より後のことはまぬ撰集にも初春早春と云ふ歌ハ撰集よハ早春の題

なり元日とよミし神楽の歳よ六日待のよりをとらみく
早歌神楽と次第して入なり
続拾遺　関路早歌　神楽ノ次ニ入ル也され共前ハ元日のよりなり　後宇多院
あふさかの木綿付鳥の啼ねよあくるも待て声ハ未なり
たのミし関乃藤川きこそとふの紀霞よ下むきひつ
藤川と濁るゝ也駿河の冨士川ハすみてよむなりゑ
文字の上ハ藤川面白さに所本きハ見んと云そのうし
なりされとも聞とみ深くて見ゆるぬと也きこ表てりと
ハ早きるより下むきひとハ川水の流かくね也之
表説云世間の万事もよ流るをず濃あるか有為の
境界なることはりなりす苦を修さんとすれハ天魔
乃障碍ある也花よ雨風月よ雲霧の障必ありあ

佛者ハ苦楽を離れ善悪をもわすれてを極楽とし
浄不浄のわかちなく浄土とす只自然乃道理をむね
として世間よ心を坊ハされと本心と奏とすこれと
表言よハ大日の位と云
大部の要説ハ長うるく優見弾をあらすハ鬼仁太政
乃君王此ことし又根本ニ天地万物の源も善悪を
ふくまれ無為なる自然よして万物を造化を同時の中ウチ
なりと云ハ温和なる同意也　拾遺集要説さ云出
たる本より所に
拾遺集　まさんといふやまうりすや三吉野の山も霞てけさハ見ゆらん
見れの山不破の中山雪消くとる氷乃関の藤川
或説云古今集二十巻大歌所の部なり

人の心思の義川絶えて君よ法ゝん万代まてよ
世奇絶ゝて君よ法ゝん万代まてよ
勅考にあひ官位を万代までよせど八十六代四條
院乃文暦元年に七十三歳にて出家の身となり
を述懐の詩ありて下むをびよ滅をもゝせり出
つよ述懐乃詩ゝ毛詩よ悲者真陰吟日悲
ゝ云ゝ詩よある所ゝ聖人を
一ゝびい強るさよ所ゝ出るか宗家の一事の程
とりつく弦の音を蓋ゝ仁道よ非を苛政怨
於虎ゝ有ゝ山ゝ言ゝ世間相常位を知人ゝ本分を煩ゝ非
世のさゞと世間相常位を知人ゝ本分を煩ゝ非
ゝと知ゝ一百人一首奏歌を有ゝ辞の本ゝて王

道述懐の詩ゝ云乃影ゝ定家卿ハ末世の歌
花のゝゝて實のゝゝを常ゝ
心敬云撰集ゝの歌ハ大やゝに長ゝ幽玄ゝ月百首
ゝ千首以下の歌ハ
百ゝ歌乃ゝ
歌ゝ
右の古今集の詩ゝ出ゝて後ゝの歌ハ義川よ
朝家よ宦官ゝ
影千載九歌教訓不知仕官
影ゝ義川の義川清家の
今の世ゝ乃川ゝ
有ゝ仏法ゝ
或説云弦関の中に関義川ゝ
乃河ゝ
勅許ゝ式述懐の詩也 勝呂乃除目ゝ正月十一日

より十三日まで三ヶ月任外官也春より成られども下
国おくれい岩川の帝乳母なんぬ事と深き霞ふといつり
定考會と書てかうでうもとよむい名目なり八月
十二日なり司召とて京官除目と云也
縣召い近国い一任四ヶ年又陸奥九州なとい一任
五ヶ年に成く六ヶ年み上洛と
あさかさるしみにめ〻せ年とて新れひぶりすなり
詞花集の小序に大納言経信を宰帥とて下る
女川尻女ゆりてあしくく先成
六〻せとて来いと海さん任吉の給べき旨とていとくあまと
津守国基
湖上朝霞
あさかすみをロ舌め渚乃八重霞えやい吹とく志吹れ乃風

朝開と書也ばくをよ仏りなし乞い朝といふすなりみ
数年とあさしきくくも係り義い同なり八の字七乃
字い数くつ成也八百万神八咫烏八重垣神墨とい
八坂瓊御続くと云なり四のるい不可得而吹解くなり
海松和布い湖よる紀なり也教よ舌め渚くいつり
万葉の歌に
只舌めてを江の海よりくめ吹くす乃風の静なる良
秋風いあさ黄紙てそいつしなり玉風乃むし玉霞乃
玉風を和めて霞と吹そくさぬくよなり山ふりて
えやい吹くくと也霞よるくそくれて面白帝乳母舌
国もあきくなり湖光くいくを江の海なり
正吉云霞い陽乳なれい冷乳なれい冷くと云

私ま去年立ちる年立のある名ゆえて朝ようすくよあり

霞隔遠樹

三輪の山先里うすむるを川いてふあひうん二すの杉
遠乃字の山い三輪と泊瀬者ゆ隔てる雨をいい
きり三輪より先霞ゆる言あり又義ゆ三輪ゆ待里
くいい習いきり行去くゆ三輪くま婦の契あるはの
言ゆ古今集に
行去乃我志りせさん初ゆよいてゆ人ゆ絲くいてん
泊瀬川古河のゆゆ二年ある秋年とてみるあひん二年ある秋
霞隔つまいか言ゆみゆ者ゆんくあれもいてゆあひ
乃んくゆ乃
古今
三輪山と言ゆめいひる言霞人ゆ言ゆ言ゆ霞ん

里人ハ今夜こゆそゆ三輪川の清き流ゆ出霧ゆ
羇中一聞鶯　羇ノ字ハ遠キ旅ヲ云
乃ゆこ出くきゆこゆ乃ん衣ゆく言ゆ言ゆ乃ゆ言乃ゆくひ
新ゆいハ古郷ゆ連絡ゆ新ゆ新ゆ言ゆ新の白新郷ゆ言ゆれハ
杉ゆ猫ゆ折ゆゆ乃ゆ乃ゆいてハ二ゆ去ゆ只の新ゆ言ゆ乃
故郷ハ面ゆきゆふゆ世ゆ乃ゆ者ハ新ゆいて
新ゆゆ詩ゆゆ古園ゆ新の乃ゆ言ゆ言ゆ新ゆは
山行の白ゆ乃出ゆ新ゆ山ゆ用ゆ迎ゆ帰ゆ衣ゆ乃ゆ物ゆ衣
乃ゆいハゆゆ常ゆきゆて言ゆ乃ゆ言ゆ言ゆ泊ゆ我ゆ常
使ゆく谷ハ上乃山の乃ゆよゆ世ゆ乃ゆ新ゆ言ゆ乃ゆ
使ゆゆ言ゆ深ゆ谷言乃ゆ友ゆ常ゆ行ゆよハ乃ゆれゆ
世ゆゆゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ

あやしくハきよらなれハ衣きてハいひなさるゝと也（元良親王）
山鳥ハ尾上まで満めるよし也 きてそしれハ衣の縁ある事にも
音羽山の事也 是を本にしたり 山ずりとハ摺ミ山
をおもはせたるなり 遠山を摺たる衣としハ小網
まや梅か枝の一入摺の小忌衣 山藍にて摺たる也
衣也 その摺衣 忍の根よりの衣しハ色よくれなゐといふ也
萩すりて摺たる衣 萩か花ずりなどいふ類

羇玉篇云 荆荷切 緤也 纏羈也 亦古文ノ羇ノ字 絡頭也 支韻ノ平態
門ニ羇寄也云々 和玉云 旅也 羇客ト云字ハ只旅客也 羈 万葉ノ四巻ニ
旅ト訓ス 支ノ韻 羈門ニ馬絆ト注ス ヲモガヒ ヲモヅラ也 文字ノ方ニハ遠キ旅ノ
心ニ用ユ 羇客ト云字アリホダサレタル旅客也 後柏原院御製 羇中ニ憶都
宿コトノ一夜ノ友モ過コレハ皆古郷ノ人ニコヒシキ 又古今集九 羇旅 惟高親王
ノ伴ニ狩ニカリナル時ニ天ノ川ト云所ノ川ノホトリニテ 狩クラシ七タツメニ宿カラン
天ノ川原ニ我ハ来ニケリ 業平 朱雀院ノ奈良ニオハシマシタリケル時ニ手向山ニテ

此タビハヌサモトリアヘズ手向山モミヂノニシキ神ノマニマニ 菅家 撰集ニハタビ
旅ト云題目ハナシ皆羇旅トアリ遠キモ近キモ旅ノ心ヲヨム

隣家竹鶯

山住の園生ちかく所なれて竹のかけにはさむらひしを
古今俳諧部に題不知詠人不知の哥に
梅の花見にこそきつれ鶯の人来人来と厭ひしもをる
竹ふく寝床霞ハさしも鶯も鳴けハ朝ねきされど
此二首ハくよめり 鳶鳴をと云きよにしく 鳴ハ人来と
聞なして也 我竹の良しハ竹の葉ハ山林なる不学の我
ら竹のやうな近くとハ謙の字ともてなり 下意ハ
賓師乃位とて其の職にわらぬ客人なるとの賢智
の人か國家れ小人乃行ひ不義なるを戒云と戒むるなり

真家と居くい真ものをも謝ごとくいつり必その月
み災来る也又義堂とふ人よりして若子の来るをいく
梅もいつり　清少納言枕双紙に堂に敷ちるぬふ
といつり今称ごとの朝乃とくびちれをそり　源氏物語
又堂の巣そらに松とあり松と巣くふくもくみり詩
ゑ月に寝床い梅竹ちり樣をつきて寝家とい
ゆくあり

田鶴若菜

小ゝ面の氷てのこるあをたゝひ緑れるをそすれき
畔もそのちれあるれいゝ不氷ゝ也氷のゝぐ強し
ゝ畔乃若菜ハ氷乃消ぬ残かるれてをもと
くちれゝ也附ゝ乃の見神を正直にありくとあり

野外殘雪

春日野ハきの人ゝ乃宮の清ごそにふりゝ人出る袖ぐ敷ゝふ
題のかけ字い添ゝの也ゝ也ゝ野まそ也殘雪
とい去年の深積ゝ消殘くまゝ雪ゝ殘ゝ去冬
奇いゝ乃雪ゝ乃てまに深をゝ殘ゝ二
候ゝ小見あり

春日野の若菜ゝ袖ゝ人のゆゝん
（拾遺後宮）
白雪にいざ打ゝひ乃ゝ若ゝん
清ごそい清ごゝ紀よ也出ごそゝ云詞ゝえも出ゝ
紙ちりゝ人とい雄ゝ袖ゝ人ゝ雪乃縁ゝ
詞ゝ源氏物語ゝゆくそ乃清ゝ人ゝふりゝ
させゝゝとあり也ゝゝ清ゝ事の次てゝ清

かり共とゝかるるふわざこの市路いとゝいつゝるるり作き
い邪の香れ眺白のゝあるよ袖を歩振て出行数そゝと
ゝり或紅よ雪ハ昨日降く消ぐさゝれど今日若菜
を摘まぐゝれゝとね日るれば経て野よ出る袖乃数
そゝゝ也色いかゝ方よ四ゝゝる俗也

山路梅花

色も香もしらでそいこえ梅花ゝ梅花ゝ乃あきゝ人のゝ
梅も白ゝ雪ゝいとゝぷゝ山ゝにこゝれゝ雪ゝて宵ゝる
君ゝて非ゝる色ん梅花ゝ花も香も知人ゝ雪
此二首の和歌とゝくまぐゝ乃ゝき曙よ消ふゝて
也ゝ紙こゝゆる人ゝ出ぐゝの人よゝ乃ゝ也一二乃ゝる
情ゝ乃ゝて是非をゝゝきまゝゝる人ゝ乃ゝぐゝ也ゝ

九

ゝべのまい付ゝ曙ゝは曙いあきぐゝのとゝゝて秋
いゝ夕を曙ゝする小同じ乃ゝ乃暗部ゝい鞍ゝる
乃一名ゝり暗ゝ方ゝ乃ゝよむい清ゝいゝゝり物をく
らゝる方よゝ曙ゝ奇ハ濁ゝいゝゝり

君ゝ奇ゝぷゝ山本ゝ流ゝいゝゝ乃ゝ市波ゝん
ゝぷゝ山本ゝ流の色ゝ乃ゝ出ゝゝゝ

梅薫夜風

白い梅ゝ梅ゝ薫ゝ夜風ゝ
宵の間ゝ風ゝく香ゝ梅ゝ乃ゝ出ゝ早ゝん
梅よ薫ゝ紅ゝ梅ゝ乃ゝ方ゝ梅ゝ香の
ゝゝん梅よ薫ゝ梅ゝ時ゝ夫ゝ早ゝ
ゝり色間俗の奇に

五月やみ雲ながれて稲妻の神よ落ちよ雨よ降れ

はかなき風のなかれ同じ橘ちり夜梅花の白き紙

早ふ喩てる古語はは雨よ不用こ只早や出んと

歌のうたれて推量ちり

水無月　古柳

五月もうつりかわれ柳をみゆく川乃末の世おそる

伊勢物語よりゆく川乃くるれで橘を八ヒをを

ふるく因所の須よ木の陰にとり居くゆをといひひ

くりとあり世末乃陰を柳と見てるこい昔より

八橋よい別の末とよりまぶ故り柳と変宮して業

平のはとり宮家の今ゆ玉陰まてい年月のうつり

にくりるとこ須よ古柳とはいくくり水約川とれ

八三川四八橋よなる前約川とれい泊瀬川よなる

ゆくく寒ゆ前ゆく川とうん泊瀬川とくく下ゆい西若

乃云二名ハ五月の陰るるよくく鶯ゆ何事こと末

世よい裏るふ柳ハ変ってる盛裏ハ世間常住の

相なる紙覆ぎり金情限ふ　異説文こ不用

八橋よ緑の柔とくりをてくてにまぶ玉柳うか　後成仁

雨中待花

くくりやまのあしたる月樹ゆ柳ゆ乃いさ先のまこ雨ゆ

今日とは雨の降る日を指とこ白い雪ちの乃

歌のいさ先くくて称ひといふ古奇の須くくちり

雨益といさめくゆ非ど花咲といさめくく

彩雨　養得自為花父母洗来寧辨菜君臣云云

雨て紀のいさあのやうにいはとさうすることもこのあも
まとあれ月乃ちを宮よりせうり

野花留人

そ後きりうう世ちく候ちを花ちにいる世も聖人乃ちる人
むさいる二伝あり一よいむ慶義洞この河い莊厳さし
まうも極のまと中略てきを伝ちを一よい禮極也
さ奇ちてい志の命きいはる憂てを紙も門をする花
乃ちにいとをぐら仕しくく千世も跡人よくをんと跡
花を賞じていつう跡るあるいのちも千世ものしんを
古今集に志性法師の奇歌

いはでう聖べよ山のあくがれん花ちにいる世も人ぬ色
これい志性ぐ我一人乃やうにあり黄門の粉骨を法人

乃命のじんとを光りあきるをとはぐきをく物ありて奇
にはあるを千世ものへ乃法人よ巡の留人のをあり人の
命を留ちをよあり　玉極内の文跡ハ平らきをくとよ
める奇い莊厳乃極まる内裏といふを　異説多し不用

遠望山花

色海をいまをこの色や海ぶあん法をさを仕宮方の山乃猶
二のる作者乃粉骨也花を悉くをとを見てる至中
よ海をこの色も海ぐ宮紙を也まをこの色や海ぐあん
といふ詞よをを宮紙りをせをり妙ちり色を山をを色
と花を紙見をりけあをを紙よ古今集假名序ぬ
秋乃ゆへ立田川よ流るるもみちとい帝の御目よ流
るるのひ志の物古跡山のさをい人丸りをよりを

かくのごとくかはるゝごとく常にハ花を雲に見なせども
此詩乃作意いはずとも花なれども其実の字も
添ふて有らんとぞ下の句ハ君子多則ハ小人陰小
人盛則ハ君子光を隠すといふ義なり

暁庭ノ落花

あけぬるの其のうちぬく吹風に梅乃みどりも散てける
凌晨(古今ニハシメ)乃朗(ホカラ)かにつゆきえバ其のがさぬく落るを備き
其のがきぬく藻汐草ニ云暁といふ心也己(オノレ)といふ
事はあられ暁の別ときぬくと云梅の縁ニ庭と
いふ字をもつてきらり面白き云詞ハ舊(クコロ)情ハ新(ク)といへる
ハ此詩をもて見るべし先梅のちるに吹ちらしける花を又
風ふきバひらこちも別(ハチ)乃面へ吹ちる追(ユク)花乃様なり

結句ハ花をぞいひてなりけるのがさぬく消ゆる乃筆
なり秋明方之題の暁乃字義にあたるなり　他説多之不用

故郷夕花

里ハあれぬ庭の桜ハふりにて旧をとふ人もなし
荒異(オハン)ぬなり上るハ此卯のころりかゝりさ深なり
さくも古木ニ咸く見る人もなし里と今更て
花とこそあれと雖(タレ)とこそむる人もなしとあり
誰彼時とハ暮と共の暁ひとあればこれ此とも
さきたり結句のまなしと云詞まちかく古の心ニ
里ニ昔忘れぬ古木乃花の夕栄(ハヘ)ふ哀(アハレ)ふかき此
そも人とハぬいとゞやさしき向ふ人なしといひ
残しけり　他説アリ不用

河上春月

ゆくすえのながれてとゞまるすべもなし川の水の
流波和の歌より始まる川を詠じて潮くゞる
常陸国乃名所之事の題の歌に
さゝ波やこの潮くいとり其時の月くもりてこゆる
神ちり月乃流るゝ波月ちり春の流るゝとい書
其之春の書紀ゝの早きを川乃流と喻へまゝハ
つよくふれを成く春乃ゆくへにかすみこめる月
だるゝもちりとゝく
新拾遺
夫木三月尾
今日くれぬいたくゝ其のゆくへ又佳人と和歌ふすん
夫木雲ゝ
来年も雲ゝ今日といはひちりいたくゝゆるゝ其ゆくへ

深夜帰鴈

春の歌ハ八声のなもちりぬまふかきの夜ハ月のいとゝ其ゝ
島のなりぬ同よ深夜の雲あり上るゝ下るの同よ什
麼と書くゝのゝ紙八ふかに侍あり帰ふ乃とかゝろ意
久方のしらのゝ其紀ふかに日ふ乃ちく花のちるん
此奇数乃なちくて留ゝり此歌ゝ古来に侍ゝ

藤花随風

春ゝをゝてゝ忘ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ藤ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ
まん風の吹くゝまゝゝ藤ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ
町ゝ乃ゝ也ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ
ゆくゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ

てうてうふるかりはきかいはるはるといふるを

橋の色の歌冬

はつ橋のよるはしりくるてうのこゑいとやみなりよきこのふるさと

古今元稚詣色不知

ふるの雪ふるとも見ぬしら雨にて

古今の歌はふるの雪をさしていふなり猶るいてふざるあるべしふるの

梅のゑとそこそこものいふこゑを抱するなり

指別花生那長柄橋の敷るゆふ基善云男人指を

ゑてこゝばは橋成就をんといひこゑで基善を指よこそ

らまてう真娘の内四人物しられどもこのいこゑ流よ

就の方へうとはは雑の時とはの人討死されば姫方に

このつくて文い長柄のちゝ指ゆずい雑もいれざるはし

おかれは山梔ゆるをはは山梔ゆるれば山梔ゆるれば

下のふるものいこゑをとうしこゑす十ゑるも口あり

妄語綺語悪口両舌

千載

ふる郡の色はそすあるふるゆるれ下ゆく井ゆの川の

舟中暮春

ふるは桜ゆすゑをきのく友ゆもゑれさうはとゆれすもう船

の一拾遺ニ忠岑

ゆはくゑ長ゑ長ゑはうるゆ地ゑは長のうゑう

ちりゆるまゆるゆきゆうはは友のゆりゆ地一説云

ゆるまはいまゆずもうゆ境をうゑれで雪ゑきは

まゑちりゆ忘ゑのゆはゆ友ゆのゆゆはゑはうて

ゆうゑゑもせゆくゑゆゆて潜ゑゑれうゑ

異説ゑゑ

卯花垣　夏十首

卯花の枝もたわゝの雪とのみ見えしを人乃山もとのゝ
枝もなびくまでは雪乃ふるとゝ又枝もたわゝに雪乃ふる
い枝とゝ枝との間乃雪とゝ成る後ちり間なきゝ雪乃
云卯花の枝乃たいてゝ乃もんてゝ者い我宿
をとゝりゝ人も有也今い卯花乃ゝり宿の神者小
仰めゝゝ卯花の雪乃面白ゝ紙乃ゝ也如ゝ
折て乃んで者で去めべき枝乃たゝにをもる如雪
玉川とゝ者小ゝ卯花を雪乃ゝ者ゝ
光空云ゝ可見ゝ雪乃ゝ不用ゝゝ伊勢物語
惟喬親王と業平乃ゝ小野の庄家ゝ雪乃ゝ
て雪をゝんゝとゝゝる無雪乃如くの卯花

あゝ雪乃ゝ雪を乃ゝ小淵とゝ成り間絶ゝ人い業平ゝ
ゝ探四ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ雪乃ゝゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

初聞郭公

郭公ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
一乃日ゝ初の郭公ゝ乃ゝ乃ゝ去年乃古歌
ゝ云郭公妙ゝ乃ゝ西者云古方の神と仰ゝてゝ乃ゝ
ゝ乃ゝて早苗とゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
今
文月待ゝ郭公ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

山家時鳥

[illegible]里にまちもはてしなき郭公こゑのたりすぐるなり
世里といふ所いと高き家をまもれば郭公こゆるいとこゑもはるなけとなり

一百番　夕雲にふるこゑのこゆるいとやをさうりをうれ作　人丸

池朝菖蒲

あやめ草今日ひくあやめ池のみをのうち月を洲てひろ海
今日ひくといふ月の日ちりをものごとい菖蒲をさしそ更
洲ほうの池のみと離るる菖蒲と真別とていふ月の日ふ
うと菖蒲とて屋をふくちり
見ちのみ清香の沼乃花ぐつうるうるうるうるん
西者云ひくうるうるれもれいさうねうまと見意とうる色
りて

うはし清水の沼乃菖蒲はまもうる紅えはいむすとて

閑居蚊遣　愚抄二ハ蚊火下り

こぶ海とて煙もうてうど河ちてぬ作のくるれわくのあり火
作ハ世を通るる人よ仮あり作林よ七乃哭き人と
ちりみ山桜の続うるびく若作ともをちり端
ひを清さひるり河ちてぬ作のくるひ乃奥られハ
燋とても蚊きの煙とは月海まづきと蚊きを裏
の松ちれど岩作乃変の作乃くるられだるり
河ちうねひを富士の根いつとそらのまうる岩作ん
うる須云作奇乃稽ちり

盧橘驚夏　夕ヨ

神の香ちを花ちもよ藤とも絡く雑面ゆえ乃面新

橘の香を賞する義也世俗人乃神の事ハ
世覚しる橘り殘まぐも義をみし人乃わりを
ハ何ぞと留まるゝ　絶句の詩ニ盧橘花開テ
楓葉衰の增韻ニ盧橘を即枇杷也とく文詩学文
成乃枇杷乃部に盧橘あるなり　文選ニ盧橘と
ゝ見り山とゝ記ハ橘の花咲と共ひられハいたの間
ゝ秋ゝ紅り楓の衰命とゝ橘を常世より種来る
されん黄を忘るとゝ橘ハ常世より種来る
橘とゝ見り　藻塩草にとゝ也物この
日本紀云　神武ヨリ四十二代文武ニテノ紀　十一代垂仁天皇九年辛酉春一月庚
子朔天皇命田道間守遣常世国令求非時香果今
謂橘是也十九年秋七月朔天皇崩明年三月田道守

至自常世乃至常世国神仙秘遁俗非所臻是以往
来之間經十年乃至田道守三宅連之始祖也

森五月雨

俳人のわさぬそあーや五月雨乃垂にくれ衣ぬれる
山城の名所乃森ひのの杜ちり散る五月雨れ
垂に杉ぶこれぞ俳人乃衣の濡よかりく河ちり
ちゝ見ぬしに山森乃濡ぬるとも也　異説不用

野夏草

あくり世のわくやう下紫たくあふ乱てあるる草と海ん
化野と名所ゝ月も四来考とあり常ハ人を
葬ぶ所の名ゝ月も四来考とあり常ハ人を
掘ぶれゆへ見ぶれるあふしの紅を帰てよあり

よられつる舟もなれまのうきもとひて流るゝ夕立のそ
世野もせハ野ゝ又京ゝく野の狭ゝもいつり月村雨云
ゝもせハ野ゝもせよ同し俤ゝ道狭ゝゝも道面とも書也
八雲の新紙云座狭山狭宿狭ゝゝあり初句乃ゝこい
夏ハ日盛ゝ夏ぶの照ゝまくゝよられゝるも流ろひ
夕立ゝ降ゝ消りゝのゝに成ゝる甚ゝく小蓋ハ
祇ゝ為ゝわゝ為ゝ夏の日乃ゝ降ゝ雨ゝ待ゝ
雲ゝとゝあり照ゝゝされゝも只降ゝゝとゝ降ゝ乃ゝ雲の
雲ゝ一首乃條情ゝゝゝ紙ゝく夏の季に用ゝり
違ゝ歌ゝは蓋ゝ初句ゝゝても秋ゝ歌ゝゝ又ゝ歌ゝ
乃布留野の小蓋ゝもゝゝあり西ゝ云前蓋の只ゝぐ
彩ゝハ秋ゝ前蓋乃秋と待ハ祇ゝ為ゝ為ゝ乃也

新ゝく淺茅ゝ乃ゝ前蓋のわゝひ只ゝぐゝ秋の夕雲
世野の俤ゝ夕

綱瀧蛍火

日ゝ新ゝ只ゝ咲ゝてゝく散ゝ乃ゝ蛍ゝ若ゝゝ光ゝゝ
古今
光ゝ乃ゝ紀ゝ若ゝ春ゝ也ゝ秋ゝ也ゝ
世ゝ野ゝ俤ゝ花ゝ乃ゝ光ゝ乃ゝ紀ハ日乃ゝ光ゝ甚ゝゝ乃ゝ谷
も今ハ蛍ゝ光ゝゝ成ゝ乃ゝ

紅路夕立

思師ハ
夕立ゝ袖ゝ袖ゝ乃ゝ衣ゝ乃ゝ
袖ゝ乃ゝ袖ゝ乃ゝ俤ゝ俤ゝ衣ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ紅ゝ裁ゝ乃ゝ歌ゝ乃ゝ文ゝ乃ゝ
あ乃ゝ文ゝハ哉也

初秋朝風　秋二十首

秋きぬとおどろかすなる蓮生に新まの風のかをりよ
蓮生とは秋の荒さる所より早く立さまを云ハ盛なる
所ゆへ立なり

春ゝゝとおどろかすなる山みちに霞てけさはたゝなん
西行法師撰集の歌に春ゝとおどろかされし吉野山春立
とゝ山ゝに霞ゝ所ゝ岑の詞を能てよ
秋の来ぬ検見(シラベ)ぬよ風を初てゝ山ゝ蓮
ハ蓮ゝ成ゝ師云秋きぬと法人いへるもよりとれ
ゝ山ゝ我ゝよいゝ山ゝ

ゝゝ　異説文不用

閏月(ゲツノタナバタ)七夕

国会図書館

天河文月は名のごとさもれて天衣やうよめるなるべし
文月は七月乃天名なりそのあとはセタのあとを
天衣なり上るよ潤月ゆえさう後の文月よい七
夕れ逢てこれきなるべしと也

野亭夕萩　亭臺　唐音八毛

秋萩をまねくかへの夕雨とよりや乱さで宿のこんか
萩の雨をまねんとこれだをねよりこん人い枝のごみよ
こ雨紙沼云枝のごとと宿くこ人所新きなり雨
乃宿のごこ也又我宿のごこ分ぐ夕んの也
宿くハ亭のまを云亭ハ家のるなり物ごこ
雨乃これちんこ也正古云これも物言を取一
枝なり

江邊曉萩

明ぬる萩の末葉ホのくと月乃入江を出所私人
明ぬる河こ所入江乃京乱言語道断なる紙面
人々何ともわかぬ紙面を出ととこ也崩人重利
狂別離ということのこなり用面を詮ホ京乱と
ハ何ともわかぬ紙と知ぐき風情言葉奇ことそ
正古云曉月よ明ぬ乃出る入江乃住京乃秋
なりこ萩乃穂といふるべこ末葉藻汐
草などホ萩の穂ことこ所所所　撰集三モ見エズ
萩藁葭也古廉切萩藁也玉云徒歴切萑也萑細
草也又曰荻蘆荻草穂ともし萩こ移りこあり江
にもよみ撰集ホも紙萩萩落と次第と落

ハ不後切花葉布

山家初雁

秋風のそよぐまがれる岸こえてとやまの里よ雁いまはこゝ

風ふくにもあらぬを秋の岸といくかはこゝ

ちく越て雁乃里中へうちゝ初てゝ也西行云雲ゝ

海ぢまで岸めづらしき初つがきかな

海上待月

淡路しま秋ゝさ岸をかぎりて出る秋うしと不知夜月

古人

月

海辺のかざしにやるゝ海ぢのかぎりてゆはわたゝ

万葉

山の端よいざうゝ月を出んと待つゝふ秋ぞらのよけ

これも不知夜月とゝあるゝ右三首とゝ西行ゝ

詞乃花撮ゝ乃ゝ白に出る秋うしとあるゝハ月の

ゆゝ出ぬを待秋ゝ松も面白ゝ月ゝ出ゝ

都ゝ西行云ゝ海ゝ出る月ハ浪をかぎりゝ

とゝ云ゝ月村雨云住吉をかぎりゝ

出るを見べきよいざうゝ

とゝ云ゝ又出ると見ゝ

秋ゝ出るを見ゝいざうゝ

月とゝ山の端を出ぬゝ云也望月とハ十五日の月

ゝとハやゝゝ出る秋ゝ月とゝ

夕月乃光ゝいざうゝ月ゝ

八月十五夜月明方の月ハ入る秋もいざうゝ

いつの日か紀よ不意(ニワリナク)とよむいにしへの歌なり
玄旨玄海上の歌小浦とも又磯ともよめとも海
乃字入べからず

松間夜月

神ちかき色やそへけん書風よりぬれぬる月ぞすゞしき
あいまなくいてゝあらはるゝ神の宮月さゆるなるべかるる
正吉玄世京の詞を用さう月の歌よんをれ松にぬる
さるゆうにんゆるくとをきれそをきのこして緑よ
いろこゝろぬこ緑を六位なり　五位八朱四位落紫三位法紫
官位いひさくいつかるこれも神ちかきるこゝろ
ぬるゝ八涙をとゝるこゝ貞なるい榊(さか)なるこ我下宮
迷信の袖乃涙よぬるく貞なる月ゝく結白けさく

なれとい松を不変ゆてちくぬ木の間をとりつる
無てる月の神ちりされも風を間を出来く
月乃新りりくゝ体をとゝ(ムカシ)の新なるくゝとるなり
て松の間をるまくるゝ月のり
源氏明石巻に月のゝかゝきくゝ比美の色地も
せびをゝ美の色花せぬとい根のゆゝちるくゝ李白を
美するくゝ杜子美が詩よ落月在屋梁猶疑見顔(クハルカ)部
色　拍月曰からぬ貞うゝみ貞をゝひ寄ゝる詞也
俗とべうゝ

深山見月

新ゆゝでいゝる孔雀をとゝいうも月を人やこゝはし
山ゝる人(メカ)もすゝあぬ梅花いゝる孔雀ひを我ゝうやさん

此哥のこゝろあらぬハさてゝやさぬ之不愛也とさしむるハ
甚とゞる也又文字ハ此哥は我見るやさんといひと花
かゝざる花と月よむるかを除す詠歌大概よ以下季
哥ヲ詠ニ意雑ノ哥ヲといふる法たり正吉云筆のこゝろみ
乃ことさらんハ慰(ナグサミ)ニことさらめきまてハ移しきて也風吹す
さむハ吹やむたり風ことさらてハ吹出る也雨ふりすさむ
ハ降止たり雨ことさむハ降出る也

草露映月

むさしのはたゝぬきことあぬ白玉はすへ見れども月でこそ
白玉ハ志らぬ哥の意と貫(ツラヌキ)とめねより玉といへり見るが
らハ皆たゞる也哥とを玉ふ成して思ひ留めぬとハ
散る也志る袖之月乃こぼるゝといへる思ひあり不用

関路惜月

相坂ハうつらん月影我とても見ゆく月乃関もるぞおもひ
拾遺六ニ物ヘゆくりなる人乃ことり関こゆるとて
別ゆく人やまどひぬ相坂ハうつらん月影ふくこそ有まされ
此哥ハ逢てハ字よ当て読どもひぬといへり
都あたりかまで満ぬ月影と関の戸あけて承よこゝろ哉
此二首を哥之袖の哥といひて二三句影といへり下の関
守ぞおもひハ後の哥よ袖ふ留(トヾ)めぬとて関乃あり
見るとあまたハ関を守すとも月ハ留(トメ)がたきと也下ハ紙
須云上るよ逢坂と云名ふしあまをばうつらん月み
めぐりあふべきなれとも先(マヅ)今夜乃般寝よめぐりふく
月をと留むとおもふと也

鹿聲夜友

山里の竹よりあるのひとつ友を為家の庵草枕

東坡云松竹梅三益友とく又梅竹石を三益友と云東坡賀文与可云梅香而秀竹瘦而壽石醜而文是為三益友とく〻万宝詩山云松竹忘年友

早雲賞愛纏とく君子は友竹を王子猷は竹を愛して此君と号に排顔云王徽之字子猷居滋性愛竹掌種竹曰可一日無此君邪とく子猷は義之ぐるし又竹と君子に喩る始い詩経曰瞻彼淇澳緑竹猗々有斐君子とく淇水名澳は隈也猗乃音は阿也美盛貌興也斐文貌〻あり又東坡寄諸庵前抱節君とく抱節君とは竹の名也又親

王乃唐名を竹園と云也玉葉集十六に新院御製千載賀部

とのゝ世ゝとて松竹ゝけ三百年やひとつ友とゝ〻庭の竹

同

いくゝの世ゝかきりとゝけり竹やまつよりひれてびるゝ

拾遺賀部

ひとつ友と君ゝ思ひ極の竹いくの世ゝ幾世乃陰とそふん

色ゝぬ松と竹ゝの素れ世ゝいつまゝ久しと思のゝそこ

君ゝの友ゝする竹よいわゝで山里の友い庵ゝ也ゝ家

ゝれゝ庭ゝ庭あるべし　朝綱下総竹序云唐天子賞客白樂天愛為吾友とく千五百番歌合俊成

秋友と松ゝ竹い君とれて人ゝゝゝけ冬の時ゝ

彩千載集祝部竹不改色平貞時朝臣

万代ゝ色いかゝし竹君ゝあまをいゝ竹のゝ竹

田家拾遺

霧雲の行てのゝさ田ふく風乃もゝわけ方に衣うつなり
晩田乃中の早稲(オクテ)ちんり霧雲の雲(オク)ぢを風吹むと
ゆふぎを方に衣とうつなり風情言葉奇とぞ

古渡秋雪

ゆふさりにこゝに使ぬ角田川ワタ夜あいあらや鳥ゆく
下総国の名所也夜あをかくれ雪にて同りんと也
ゆふ〳〵ぢいざこゝ船ゆるりつゝ人に有やみゆく

秋風満野ニ

高機聖の声ゆふ〳〵ゆるもあり〳〵て松ひもやまぬ山ぬ鹿
ちんさふ〳〵ひ山ぬ草〳〵よせ高機の〳〵ぬ下ぬ高ぬ鹿ぬ
御侍(ミサフラヒ)と い敷と人を云う文様弥と い内裏と云名所の
低よあ〳〵と高ぬ乳のさ高ぬ高ぬ奥也文様(ミヤヒ)那府中(ふちゆ)也

弥とよあり和歌乃両よ内ぬ高と いう霧とも吹ぬと
しぬやまず吹りふとなり風まぬよ満の名あり

雜下国(クニ)歌

月こゝれ藤ふ萩の内ぬ乃下ぬよなゝゝ高ぬ松ひもの色
萩の葉こゝぢゝと時松虫の減ぬ山ぬ推ぬ高ぬ
西去云萩乃葉ハ花よひられて赤成潤色ぬ高と月ん
ゝて中ぬ高ぬり

紅葉潤水ニ 潤ハ没也(ヒタス) 水澤(ヒタス)也 写水(イキ)

ふ川の河ぬ〳〵ゝ〳〵ぬ葉ハ散ぬ水ぬ高ぬ高ぬ
雲(クモ)こゝ小流ゝ〳〵川を花ゝ月ぬ散ぬ水よ神や流ん
これ〳〵梅花乃水ぬ高ぬ高ぬ〳〵ぬ水よ神や流ん
ゝ紅葉の流眼花ぬ高ぬ高ぬ彩をよあり移り

山中紅葉

しぐれはけしきくのもみぢハのいく千入かこが染ぞらん
しぐれもみぢしらぬめり正花云又文字ハ四方ニ
めぐりて有ゆへにふかきよりやま中といふなりと又説
奥乃紅葉ニ山中ハゆふえてりとくに紙云紅葉の奥
めづらしきにぎとなり山深なあり紅葉於奥とハ深き
紅葉とい云物奥ニハ深きるぞあまさで

露底槿花

秋風のうハ葉にふかぬ白露におちてひくとやさうかけ花
槿乃葉のとの露ハ秋風こだとを花のうきてと清ぬ
綴るれどもおちて避とおりひるもハ露ニ花のにさ
されてあはくと正花云露底といふ所をおもふにあり

露乃深さゆゑあり　異説あり不用

河邊菊花

大井川おきの浪は花の色を紙うつろひをうつ岩は白菊
埭（タイ）以土堨（アツス）水也　堰（エン）ハ塞（フサグ）水也　をしハ杙（クイ）とから紫塩（井セキ）
とハ水をとせきとねをいふ大井川ハ嵐山乃和の川也
菊（カドノ）ハ紅葉ある治の花を波と仙きね治の花をも紬
ハ面白さる事ニ拝むひたる事に波にの菊がうつりて
あら波の花ハ又拝む法るをうつろふ菊数あり
持るとなり正吉云治花ハ白き菊のうつろふ又ハ紅花
出来ぬよおゐる経ようつろひて白き花を持ぬるとぞ出来
ハ第（ヨト）まり紀異説あり不用　玉云埭ハ徒賓ハ切埿（ツツミ）堨（ケツ）
一盡（バ）也　堨（アツバ）壁間ノ隙也又擁（イヨウ）ハ擁（タク）也　擁ハ抱（イダク）也

獨惰暮秋

ふるのさらぬもう秋し暮ぬるくれぬ秋の別を
一二乃ゐハ獨の字と云若木ぶたとハ人よみれくい
いよくなり諸白若秋と源氏物語松風巻乃
前栽花の有さ仏ゐるかぶ花くろいせ宴色
この立石花ゐこ皆まろびうせるを惜ありて志賀さ
バ勢しうるまぬべき虫うるかゐる和とはてはくろ
如も愛なきさつさなりさそそしそそ称バ立湖物
うくゐとまりくゐ新しうゐ花なぶきめさのものの
ゐひ出くとくゐ世何乃ゐを取く若木ぶに別く
ハ行きさとめり上の前載とい延喜十六乃皇子
兼明親王の田途大井里よめうよ比して云源氏

君乃ゐ何と源氏よ前播ヶ寺法岳して明石の入道と
いよ姫を明石のとといふ源氏の君左近乃間のわゐひ人
ふく宿しと帰落の後月京入りよりゐよ松のまつら
ひ似ぬこゐやさを立して入道の先祖兼明親王の
田途乃大井の宿へうゐる付よ源氏より大井乃宿成
ゐくろゐを西ゐそれの初く頭ぶて松へひろんと和歌
めと仏より似初よつくろゐを西ふ寺り

初冬時雨　冬十首

今日ぞ[illegible]はらえて河内なる神なびきとや人まつらんと
そへよむといふ意なりさこそいさゆゑにそこ四方山
ゆゆしき今日洗よりとさこそ抜い押るる侍義へさで
おとしいふよ同じ字長云今日とい人だて
いつかも

ぞ[illegible]よりてとすれば[illegible]かぐらを[illegible]
世[illegible]ゆゆしき文字なりてこそとなる侍もあるべしかるすもあり
どく荒角の宮の[illegible]維束（アフサキレサ）といゆくさ侍束ちさ侍なり
初冬は冬の三ケ月乃初の日季のうちよりも万葉り
三冬（ミフユ）を注さて書束侍とよまれり又拾遺集よ三冬（ミハル）
とよ[illegible]り夏と秋よいはし須本

霜埋落葉

[illegible]

落葉の上より霜の色くれなゐなるものうつりて海のうつりと
又落葉の下の海はうつりてみどりなるものとおもしゆりく
もれとこの句は論語里仁篇に夫子之道忠恕
而已矣と中庸十三章に施諸己而不願亦勿施於人と
論語顔淵篇に孔子曰己所不欲勿施於人
注華嚴経第二方便品に十如是と説き其中に報如
是は善悪の二業なり小報ある云く如くは十界一如
空諦なり是とは十界なれば中道法性なり恕の
字の心をよめる句に

月とはいはいまだ秋のあけぼのも人や待ん

屋上風散

枝の風よりあるいまだ若もとえて風の切にうばくむしりを
音ものもけ字はく風のまもも去く如りそれり散
乃ちもむしりくにあるとこそ枝屋は板葺ゆへよあり
きの音はとなるなり

古寺初雪

ひとりあるやなかふ心根の御さ所に訪ひ法師
古今集雑上龍門は海ゆ出でて法の師ある仙聖
たちねこそあるさ人もたれのとなかふ家の御ちとん
伊勢集に竜門にて仙人の里屋とうんとるとあり
裁縫ぬ編さし人とは仙人といふ乃精

縄ちりとの神之滝を詩るは瀑布と作くまり廬
山瀑布といふ詩の影あり大和乃龍門寺て伊勢
よりの女人結戒乃地へ出て浮し流し裁縫いぬと
よる人〳〵奇れ法を雪にてうかゝせ〳〵女人不入乃
ちなの零落して伊勢の国にく乳
明を出し〳〵地〳〵の来代い聖賢乃法れをれ
歌ての作をちり神をれたりてよく溺まず
〳〵昔色とい只昔之正吉敷ぶ〳〵云も色れ字
よりの〳〵又伊勢の奇よみ〳〵名巻の面白瀑布
をもちれも雪ゞ降つゞて只〳〵ぬ〳〵神をれ
ど山中よい流く法〳〵ゝ
昔ゞや今も立つ〳〵きけるあれにも明て来法〳〵

古事記
いうみて龍田姫とハゆるすんしは古るのすみちをこそ
此奇龍門寺に〳〵色れ也作者失念と
後撰十八雑四　龍門滝にて中納言定頼
人ハ人のあれ奥との激ハ氷のまくにて波ゆせてちる
色しいま龍門ゆまつりて滝乃ま〳〵ゆくかの国れ寺
義忠がりの花乃結ちる式いう見ハ〳〵ひ結まれ
いく色ん法弁乳母
　抱いく〳〵ふき物を桃の色幾世ふる滝の志〳〵と
千載集十六雑上　紫つまるにまて〳〵仙室りゆさ
法を結まる能因法師
　あ〳〵よのてゆ人宿るれと法れ人ハ只〳〵ぬ成り
同し龍門ちの色をちゆ人宿るれと法れ人ハ只〳〵ぬ成り

仏人の昔は法とさてこれはもれきゆうといふこゝを
光孝法皇云宮家の作之い古寺の秘宝と賞して
むらし山瀑布を人乃裁著よ非ざと伊勢がつるハ
滝とよるんをちらこゝ法皇と當寺の面目ある雪をれく
伊勢がよみくちる所の作を洛くせて古今の作
とゝ紀てよめるく古今に伊勢り竜門よまうでくと
ある詞を他擬しをば女人結界の地よいあゝ近
代詩門の名乃比寺門の人ちゝ女人結界の地
をいひ立んとそいふれい詩田姫とゞ〳〵山ち宮家
乃方とより所ちてちゝ所ちるんくざれも俗言
俗然の方ち歌上也初のむゝきを俗言といひ姿
乃いゝきと俗然といふ

庭雪獣人

わゝ宿いゝよこん人よ云ゝれ称雪れこゝよ在を法うをて
ひとゝれぬい獣の字乃ゝ面白雪ゝ見紙と法きを
まゝと問ゝ法人を獣ちり宗頑物云雪乃ゝ
といる妙ちり我ゝよ法をそといつべきをを
除情ゝをゝれし

古今
在の雪に我法つをで出ふとをとられるうと人ゝ尾

海色松雪

信吉の松やいつくとふる雪にちるあまをぬを法海人
信ゝ此まゝの雪面白ゝも雪を海の目ゝいえる
法ゞきゝ正吉云大雪よ海人を不役よ松ゝ
てあゞむるをちゝぬゝ
異説多し不用

水郷寒芦

あしたゝ霜とれいそく足高江の入江の月の新さかりに
正方丸地のさかり何のさかりも月ゆかりに神ぢり
拾遺集小人丸

三河江の玉江の芦を志ろたへとのゝ霜まろねし
拾遺集上郡の名所にあり水郷を
草といふ彩よい草枯葉乃落などをよせ葦をば
よ夜ざるく水郷とあくべ水辺の名所ゆゑもむべ

湖上千鳥

水の海や月結浦れ小夜千鳥いとゞ遠の浦をたゝて鳴く
いなの海といふ湖を云月も出どいづくとゝわるぬるい
つゝ乃浦を指くいふ鳴ぞとゝ　異説多しに不用

鴾

寒夜水鳥

をゝ夜ゝあれれをあしの枕乃葉ハ鴨乃毛羽の霜ぞかされる
枕乃葉の霜紙あしの吹ゝ葉ハ鴨乃羽の霜よ
かさる浦ゝく異本に寒夜ゝあるハ誤なるべ
千鳥の彩よ鴨をゝ鳴る彩の浦乃ハ河の霜
氷冬乃月千鳥水ゝ鳴る霰神雪深雪とあり未集
廿一代集又百首和歌なゝ結かくのゝ也但堀川院
神の百首よハ雪の浦より千鳥ゝあるゝあり其浦ハか
くれゝゝゝや此百首ゝ雪の浦より千鳥水ゝ鳴あり枕
千鳥の彩よハ小夜衣ゝ磯ゝ浦ゝ波ゝ夜ゝ夕
ゝ夕波ゝ通ゝ浦ゝ川ゝ村ゝなどよりあり水ゝ鳴ゝ
彩よハ鴨鴛鴦浮寝ゝ鳴ゝなどよりあり鴛鴦ゝ鳴ゝ二種

をゐ〳〵てよむちう仮鵠の鴨鳥〳〵もよみうり又
文本集廿七表の雜の九り鷗鷺入関鴨を入るを
鴨と一字もよみ元字ハ新をれ〳〵も冬の絹を
て水鳥乃毛にはるあり連歌よハ衛と十月〳〵
とそ名〳〵鴨と鵠とハ三冬ゑ面ハ〳〵月ゆ和
奇の毛よ雪のまゝよ千名と垂ゆくよ秋〳〵すう
九十月乃中氣を小雪〳〵ハ〳〵十一月の節を大
雪と号とれたちり

水鳥

鴨 後古今 芋鴨の拂もあへぬ雪ぬよとくとけてゆ原藻水なる
新古今 水鳥ハ鴨の浮寝の夏ぬ〳〵浪の花りいく秋〳〵ん
千載 雜波浮入江をゆく原芋鴨ハ月ゆ藻ハ家よ浮寝をしも

泉川氷をゆてゆ水の波りきゆるハ鴨のひ〳〵鳥
夏葉川入江の水よ鴨ゑ〳〵そとゆ家や静〳〵ゑ〳〵ゆて
堀川院御百首 川風のこらさゆまゝハ浮寝よる鴨の毛ゑ水ゆをくらん
千載 この波乃鷺の浮寝ゑ〳〵ゆるうゆ毛ハよ毛ゆ水よ
おひのあへぬう入毛乃雪よりうゆて鷺の毛ゑのうゆ〳〵ん
右鷺ゑ毛ゆ毛ハ鴨よハ文ゑ毛ゆ
戸部郎ゑ浮ゑて水ゆ原ゑ毛ゆ鷺の村る
同 鷺ゑ〳〵芋乃水よ浮寝ゑ〳〵ゆひよゆ原く鷺ハ鴨乃毛
床のあゆ毛原ゑ毛ハ池のようゑ孫の毛ゑゆ〳〵ゑ
鷗 岩川ハ氷ゑ水ゆ朝日ゑ原ゑ〳〵ゆ鷗ひ毛ゆ
鳩 入鳥乃ゑ〳〵の通ひ毛後ゆ原ゑ〳〵ん孫ゆ原ゑ毛ゆ
さゑら波ゑの間ゑ毛水ゆ原ゑ毛ゆ鳩乃ゑ〳〵孫や鳩ゑ〳〵ゑ〳〵ん

鵠

日

陸奥の方より松嶋の沖なる海の中なる

八千云万条にてなるなり

水鳥族花　多くあり

山にはなべて鶴や近くん出えさりぐ海苔の中鳥

夕されば芦辺の波の沖なる海の村より

海浜沖なる海の村のもぐり羽風乃さらぐ海乃

以上十九首　海の乃　海乃　尾張乃

第三乃長寿に味村　尾和伎　百十七乃八沢

多くある味村　渚　清　あぐ　渚

又朝やこの田舎ハ人にて夕さりは蛙ハ渚とよむ

藻汐くまに云山の海の海苔村　海ハ去るれぐ

乃ハ張くゝ　渚馬の多ハさりぐ百無にはし訓ある成

もらべて字海のせよ海　海くよりあるそその海と海

して云羽音のさハ〻きを海の見者よりあくしく

陸奥　海すゝとハ友の渚よりあぐさるもあん稲でるき

此歌文字ハ武士ちり　薩人にも薩雄にも用ひあり

渚さぐに日ぐ

茅蜩　只今氷ト云ヒモアリ

今いくら赤ハ浪乃ちもと岩の氷乃ちもりまり

岩風よりく海氷の海ぐふ赤出るちゝや去のちり花

此奇き風よハ氷ちもも燒風よハ解ふを云文字よ

茅蜩の字ハちり海も花ちもよちりて

氷乃解ふと御ん我も結ちよりり花りゝり茅

著名仕れ今寺門あるて氷のくまを次第治の歌と
ろんこゝあり

初尋源氏　寛二十首

わすれぬあまりこの里人うしこゝ是月ど器色に松いこゆゆと
これいかゝ人ゝ此ゝ文字まよ月し幾度も神ひあまり
ちり其里人ゝいりこゝ人の方れ人るり何と問んな
まば月一所の器乃まりこれで宮ゝ其方よりもこん
ゆる紅ゝ問んゝ其時中ゝこんゆるゝ若ゝゝべ知ら
に古今の歌乃一
夕潮日さすや器紅の紅ゝ乃いつれりぬ歌りすれ歌
世今の如くけりおもしてあふゝ生ゝこんて結られゝ
風初入歌
秋の歌ようろこれの名べりも明どよ出乃時者部でへ
まりりろこれいは菊ゝ菊ゝゝろいべ口れ中

遠くも菊の花たちきく八重菊などいとをれハ風乃
ふくゝ口の中通放よりそ人〳〵の聲近く
しつる人もあやしめまくさくさ出乃門音を耳と
さてゝ風ふくゝ人の声をハ風とぐいとぬゝるゝ
出のかハつかゝゝ

思親眠（オモフシンミン）

眠親近也（ネムシンキンナリ）　眠目小視也（ネムハ目ヲスガメル）

めもとゝ所よりもえていろ〳〵ど世のいろ〳〵の事あり共
（本三百九十七頁二）
世の一りくゆゝよりむさ〳〵の〳〵事ハ〳〵れゞ〳〵あられゞ〳〵ゝ所
世須よ妻の神〳〵ゝと持〳〵ゝ侍る人〳〵り袍（ホウ）とゝ所とゝ
ゝる人〳〵ゝりもゝ所業平朝臣
世のゝゝ紀河ゝめゝ所よ所ある歌（カリ）ゝ歌ゝ所ゝ
伊勢物語乃写一版の所〳〵歌の前出る神ハ世ゝ

なりゝのゝ〳〵妻の妹乃男を所をくハ物ゝぬゝ也
文字ハ木ゝ月のゝゝ所ゝ也ゝ所ゝ也ゝ所ゝ也ゝ
乃字の〳〵世ゝ女ゝ所ゝ也ゝ所ゝ也ゝ所ゝ也ゝ
竈愛乃河を云ゝ所ゝ云前出ゝ世ゝ所ゝ
とハ親眠（ネムシン）のゝ所ゝ世ゝ所ゝ世ゝ所ゝ世ゝ
ゝ紀ゝ歌ゝ中ゝ人〳〵ゝ所ゝ世ゝ
又紀ゝ歌ゝ主伝日紀ゝ所ゝ世ゝ
とゝ所ゝ世ゝ

祈不香（ルヒハ）

ゆゝ人〳〵ゝ所ゝ世ゝ所ゝ世ゝ
伊勢物語云陰陽師（オンミヤウジ）ゝ所ゝ世ゝ
乃奥ゝ所ゝ世ゝ

と教へさりてきこしよりけるに立ちしくの覧くされバ
さく業平にはかつて是ハ在原を御禊して許ま
ともなくしなきそ文字ハ律をなりて下るハ任務
掛緒の羽を其まゝ置まへり祓除に三ツあり穢悪
を祓と留秋を祓ふと異を祓と題の許ましも
とは許まなくといふをと祈るにとよむハ一反祈た
ふ義にて色浅し不用之

龍田に遊ぶ

立田山本のした下乃かた枕かくれにおふに隠れて
大和物語に大和国守の娘をある男盗みてゆくに
龍田山にて日暮れて女乃乗る馬の障泥をとりて
しきてその物語なとしけるに女怖くや男の問ひとの

答にみえし男の哥に
古今六 葦かりみをりて本縁付たる庭夜立田山にとりくへてゆく 馬ヨリ之 読人不知
女乃返哥に
立田山岩根をさして行のゆくゑも知らぬわがこゝろかな
といひく女いつぶくに成りまりけり本説まく立田山
本のしたにとゞまりけり袖中抄に云世のさがしきとは
路境乃事にて公のせきを立つに霧に本縁を付て
四方の関に立くなるゝ平城京にてハ摂津国へわ
よるにて立田ハ西の方の関之故に本縁付たるを
なきりさく又其本縁付たる霧を須戸龍田龍康
通坂乃田関へ龍まし事あり後拾遺に立田山
本かふ吹しくとよめり

菓獣暁歌

ことしいもくぼの山よりいでられ暁ちゝぬゆめやさめぬと

若紫巻に義童乃中ゝ宮とゝ申し奉りし源氏君の継母なり

源氏家通あり朝よ云くゝぶの山よりいでられしら波

なしげるれどあやにくなる結歌なりとゝ

只くゝ文遊歌稀なる義はゆゝしき侍なり

源氏物語巻の中に消ゝ世ゝ紅ゝ義童の御歌可

世ゝぐうに人ゝ侍ゝ消えんたゝひみく我身と云ぬ義は白ても

ゆいなく成くも西名い強しんと世よいなれてゝ式さ

へゝゝ侍るゆゝゝ暁歌山をゝき方ゆ見ゝ清

てよしゝゝゝぶ山方に見れい清くよし

孔雀ゝ深のゝゝぶの山よりゝ人いたゞくゝぞうるゞゝなる

支木集よは白きのゝ式ゝぬ乃山さゝゝとゝあり

難波江の藻よりうるゝ色ゝいあゝられゝゞ人を恋ゞや

正右云此歌乃ゞにゝ只とゝいふなり

帰ゝ恋書歌

朝ゆいはゝ分ゝ神よゝゆめうゝゝゝ人もれ

上白い伊勢物語業平の歌とあゝ

秋の朝よはゝ分ゝ朝の神ゝもあいそめる義をひらまゝ久る

下白い新古の歌に

古今 業平五歌

ゆゝやこゝ我や分ゝん世ゝ義う現り神そうさあそこの

業平ゝい義紀択紀と新古より後朝の歌あり

今ゝ義紀ゝい義紀択紀ともゝ同人いなりとゝ義抄

云遣見ては美しき物なれども枕草子の絵書(ケガキブミ)
てもかくこそなどよりも同人なりとて帰(テ)書とは枕紙乃文(フミ)
なりさればよく書くいとうつくしうて同人(ヒト)もあるべきなり

遇(テル)不遣(バ)恋

なほ人いなかの中くの美なりて屋のうつぶしぬれたるのけ
ぶりに二儀あり共に男も一よいまくもらうけ給へ
不遣とは同じくいとやうにまくもなみも
あいだるとも此方頼云遇てく後よりもゆくりれ
ば人をさして外人(ヨソヒト)と云らやうなる人なりべ
中くに美しきもさめぬて面影のうつくしきこと美
しかりしのやうにいとうくいたづらなる美しいろも陸さざる
しかりしも時の枕は美しはなるとこそ遣て

も夏は見ぬ貌なり故なほ人くと云中くに美しかりば侍
見ぬとんをとこ西方云これくに地方と称肖とはくし
なほ方ども新古今に枕草子
新古恋一
我恋を書紙は何の深うして玉葛が東に風さわぐ
これくは何ぬ私はまくはくはげをうをづきゆすれ
葛ふさぐこと口のるは難面色もかりく絲ば恋ゆ
遇不遣恋の方に
新古恋四
契さやあるぬ別は秀とれし暁だうのみられとて
暁だうの恋はいかの方の方は侍あるうさぐうり侍られと
く契くざりしこと
日
恋続まくこ今は男はいられしく夕暮なて
人をも我とも恋るこさなぐ別るる夕ぐれのうとばは

いろよきをえらび給まで、さた申すられどこゝいひさしたる哥
今はこゝは尚定のさい紙い人

奠經年

秋うまれてふりしく木葉いくとうもめ春のふるもめん
秋うけていひしかぐもまわくよ本葉ふしくはること有はと
うれく奠の言こゝる色をとゝ色ふる哥と江の木葉
ふうつれ淡くちるとゝあくに侵よりてうゝ深のふるを
えるくよりて毋波路くも紫菀ともよ人侵彫ちり秋
うまてい秋よ侵くこ西吉云秋の初とゝ言まうまてても同
ふく幾回の字こ幾回もいとこ陸こ經年の侵こまうよ前出
秋ハふりしくてのいくうりちり元とハ不逢元之頼所
ふの葉ふりしくて秋ふ昌休発句

類まい偽

古今集

ゆゝふ陸てく世の詐乃いふふんたのまれぬくまを乃詐ふ形
偽とふ物ゝ今文よりそ陸こ紙り四まいふのまを
世所偽文の侵元都まきぬ人とゝいけめく其人を
ひ一番くハ非をふ我ハ人のまんとくたゝひ陸とゝ人
ありたとふふこ心哀こゝ上ゆよまい偽のまりいうみ
らんとハ類の字こ書ゝとれる文をふれい実儀さうか
ふゝこゝされも世の中れ神まて粉ゝまくれきにより
まうゝへなり

反事撥

おゝいく煙ふゝよりえ陸ふる物ふいのゝ記き分もこられて
源氏物語柏木巻ゝよ源氏表れ却妻女三文へ柏木の

掃門督の密通乃時より柏木の事に
今はとてのけぶりもむせびかれ絶ぬれはひとり煙や残らん
とあはれ女三宮乃及事
立そひて消やらぬ間をとはかりひとつ煙にくらべ
此五文字は柏木の事なり煙や残らんとあるは立そひて
なり正古云煙にくらべしはあんとのいつまでやあんと
くらべらるひと立をは火を用る事なり
今朝ちはいとゞ立ひとしほてなげきこりたる立枝の
立ちのぼる煙立のたゆたひ常のことも立こく煙にくらべ侍る
乃初に八十四代順徳院 ほりかわ 出三位 御代に関書て立歌に
立の〳〵乃聖系に柳ゆえ初てあられわりひとり煙にくらべ

くとある様八十二代後鳥羽院殿堂あるまて勅撰あり
き勅撰以後は陣に著てとゝまる新撰いとあり
されしとも 師云女三宮の及事を掃門督乃とくらべ侍
及事に掃門督あるとんとく煙にくらべしは女三宮の及事
乃初られた立の及事のなるものなと合ゆり煙にくらは
柏木の立く立乃掃のなをいと

被賦立

ちとせ出くいひ出たりて掃戸とはさらのあるはなりけるをとりて百年人元年に
掃戸とはさらのあるはなりけるをとりて我後君と作らくもる
見門のしさとゝ戸をとあをとりて我後君と作らくもる
源氏物語七女奏に夕とうと弁の尼この義に付て
弁尼の乳母ゲ夕雪とはゝて、月出尽とも物乃初の

六位宿禰とて侍ひやくとありこれをきて夕雲ハ
紅乃袴に濃き紬の色袋袴なりやいひもちゐるべき
袍の色六位ハ緑ハ位赤四位薄紫三位ハ濃紫なり
天子関白なとは緋色にして紅梅濃くも薄くも其の又
致事大臣乃袴言ふまでもなくタ雲にはなくさ紫
なり致仕大臣の母大宮のそばに一所にて書給ふ
つゝ幼より遊ぶ兄弟叔父甥姪なれり今を
家の奇樣戸ハあをといふんあるよりの出る樣乃
色ハ紫なり又戸ハあるはあれども也袖中抄に云
樣をとハ赤をとゝいひもちるといいくぶも義
乃紅く乳母の服を沙汰してもちゐる所也

桐壺帝 ― 源氏君（母桐壺更衣 二男） ― 夕霧左大臣（母葵上也源氏嫡男）

三宮（摂政北方 号大宮） ― 致仕太政大臣（帝木ニ頭中将 摂政殿一男） ― 雲井雁

母按察使大納言ノ今ノ北方也初、頭中将思人ニテ雲井ノ雁ヲウメリタ雲大臣ノ室也雲井ノ雁トタ雲トハイトコ也共ニウバノ大宮ノモトニテ成長セリタ雲元服シテ四位ナルベキヲ父ノハカラヒトテ六位ニシテ傷ヲヨサセラレタリ故緑ノ袖トイフ

葵上（源氏君ノ北方 タ雲ヲウミテウセ玉フ）

途中契恋

あをのゝ井出の下帯しもとびつ袖の涙の
大和物語ハ内舎人なる人大神の都乃使ひ大和国
よりこの井ゝ里にて六七ばかりなる女童の水くみ

なる式にて繁こく男しるしなくまてよ重玉へ行こゝろよ
成玉りん行よまつりてんといひく学とうゝ行くゝうゝ行
さてゝのもこる学をこゝに所くゝもゝをそいぬ男ハゝ
ごのゝいそゝるゝう忘ゝう七八年ゝ同一段よりられて
くゝる井よのもゝられ所ゝてゝれゝ水ゝむ女ゝもの云
ゆゝ無ゆゝ忘ゝ式ゝめゝ学ゝ一口いひく書をいひ
さゝいゝく大神とハ三輪の神ゝ井よのゝ学ゝを
契の意ゝる故ゝ女ゝ神学ゝ女ゝ学ゝ如ゝ決ゝて云
ゝ行ゝ井よのゝ学ゝ行めゝ学ゝ蛇ゝ行きゝ玉川のゝ
世所ハゝ後よ重ゝ所ゝ出ゝ出ゝ所ゝ大和物語よハ
ゝ藻汐学ゝ云東学ゝ
怒ゝ下の学ゝよハゝ人ゝゝよ学ゝを所ゝ
ゝ

後門帰意

ゝ忘ゝ門のゝ門のゝ明ゝ行ゝ人ゝ所ゝ家ゝ所ゝ
葎ハ学ゝ級よ入ゝ葎の新ゝ八重ゝ所葎学
門ゝ学ゝ所ゝ学ゝ所ゝ
ゝハゝ所ゝ

忘後所意

いゝ忘ゝん学ゝのゝ里と住ゝ所ゝ所ゝ生ゝ学ゝ
乃ゝ学ゝ所ゝ住ゝ所ゝ学ゝ
学ゝのゝ里ハ学ゝ人ゝの住ゝを忘ゝ所ゝ学ゝ藻汐
学ゝ大和物語よハ忘ゝ学ゝ思ゝ同物ゝ所ゝ但思ハ
細長ゝて学ゝ学ゝ稚ゝ出ゝ古ゝ所ゝハゝ又思乃
一名と学ゝ学ゝいゝ級よ物忘ゝ云学ゝ山学

よ書て篇よと冠ふと付るうゑ伊吉の罪ふよりしハ
萱草く萱草よと志憂草ト云古今雑乃とふ相ゑれ
つくる人の伊吉よ海人ふ苦しもも長とゑ人ゑ書ふ生ゑいつく
伊吉し海人ふ苦しもも長とゑ人ゑ書ふ生ゑいつく

依恋祈男

ゑるくよあべば世とは回て年のを行ゑ素性ゑ縄
いつゑ知て志ハ人命ゑ生てゑ有命ハ
書ハ生ゑ有ゑ行ゑ行ゑよゑ有ゑ命ハ
長命と行る浦連縄ハ長ゑ生ゑ縁の紅ゑり
年緒ハ只年と云ゑ一万葉よハ仏緒別ノ恋ノ
あり

満ゑ語ゑ

ふぶ海やいく浦くよゑんゑ汐の乃ゑくゑ取き中の西海
ゑ文ゑ大海とゑく薄汐ゑ書ゑ書くゑ
うゑゑと入くよもべしゑく麦浦くゑ生ゑ海のゑまゑ西
乃ゑくすれさハらくハ付ゑ乃ゑ海ゑれゑくゑ
海ゑ乃ゑゑ知ゑて通海ゑをゑゑゑゑ近くハ乃ゑ
てもちくさ海ゑ香満ゑゑゑく万葉の奇よ
汐ゑべ入ゑる磯のゑゑれや乃ゑくすれ取ゑ乃ゑ
世奇ゑ宗養ゑ後ゑゑ
むめさけく柳ハ磯乃書ゑ葉ゑれ

備人名ゑ

假祇のゑゑゑゑるびくゑん我分のゑゑハ海ゑ乃ゑゑ
時ゑゑる芸磯よゑる神ゑる薄の乃ゑゑゑ書ゑ乃ゑ

雅面てりの身のくるふ立姿こそ浦ふるまひ月ますみきあ
月村雨立我身の源ハ指引名ゆく海ちとくこそ能袖乃
名をとて麁ハうしくしき我方へハるびくぬゆくよ絶ぬ
世ものの名ふりくく我ゆ人の様よあひくるとの
名を借くくの事て国乃戸をあをさとくきのそこく
絶不知恋

あひ世人のかざりことばうとを名をぐりをそとふるさ
源氏物語菱恋世とく源氏君と同車あるとて
かを菱乃恋又ゆ有源角伝とふ恋女の方に
くゝ恋や人のくざるあひゆくゆ世ゆくと絶る
世ものこゆ人とハ世よとを指く源氏乃源角伝りを
むりんく今日と絶しにさハなくて世とく同車ふり

今日と絶ゆるとは今日祭の使りをとて那しけるふ
ゆり公事根元日祢乃告あて今日あよ人く
菱く桂くを薦くてかくほこれをうりうくくこ
こ二のる人乃かざりくくりるとくハ源角伝りてく
同人かくくと菱と逢のなよとせくちり

互恨絶恋

のの世あるれとこひもかさこえぬ里のちるべ乃ちてべ母
左大臣
あまの住里のちるべよあ
世ものの浦見を指りよせるり藻汐車かくくらゆ
よりる文のくくふ用るくこ三のるうくを絶ぬハちりひよ
うゆくく文を書絶くを里のちるべとハ海見とく
恨くゆくべくとは互のなとをあるうくんなの

をらいそたり

暁更寝覚　雑二十首

あきをしめぬ鳥の名ふくとゝ霜の袖をかゝ影きせ世代古こゝ
鳥の音ハ衆流をれとも霜り月をさ侍ゝとゝ
雲吉云宝衆よ月をさ侍ゝ代く故事ゝも世ひた
つく侍ゝ云ゝ又ゝ系あり朗詠ニ禁中ノ都良香乃
白り雞人暁唱聲驚ハ明王ゝ眠ゝ漏刻の官人
ゝ暁鶏の啼ゝをゝ聞て夢ゝ奏とれ世ひ
后起て分と須へ次よ帝と起ゝ卯時よ出御ゝ成
て百官乃出仕をゝ万機の政を聞ゝ
暁ゝ鳥ゝと起ゝ初ゝ鶏ゝ初ゝ女房よゝ
て衆の明ゝて寝所ゝ帝ゝ王ハ政よ非を百官も
赤婦人暁起て夫を起ゝ卯刻ゝ前よ出仕をさ

ともし火の前の色は地境にある萩の露けく寝覚して昔
乃宮せしことを思ふなるべし

落暮松風

うへをゆく我袖も此山の松ゆふ風は風乃こゑぞくちまき
薄とは漸く常なる時分なり正吉云夕風の冷
じきを聞く音も乃松まで通く梅たると後悔する
なりまく夕への八文字にかありそれの時はさゆる紀
ふかく我か極悪しか悔と知り下乃色て世の人露
かとなりて後の思ひを顧ざるに比す

雨中緑竹

色入ぬき葉の竹乃うちつけに身をも常盤のあはれ世中
家頌云五文字不知のぬき葉本には打くのうへの我

身は冥途にありてたゞやさしく色のおもひを去る葉乃竹
に比してうつり往物の絶えてハ天乃色といひける家
にもなの色と正吉云身をも常盤には静にしたる世中
ありハ我身此ことを思ひつゝも往物の絶の色同じ
堀川院太郎百首には常盤の葉にして後頼
風雅十七雑下上八九近江
けくくしと見えハうき枝のぬ身をも常盤よと千世ぞ経ぬる
花洗ひ衣人もて住よりも衣の色かはりぬるあり竹の末
葉の色かはらぬことく我身に住乃ありし緑ハ哀世中の
おもしろく伝ふる文義朗詠下題雲賦云竹斑湘浦雲凝
鼓瑟之蹤云々湘色斑竹の茂てしみゆるハ雲乃結ぶ跡
を添ぶ激て二女の涙を残する歌として百詠の竹乃注
注云帝堯有二女長曰娥皇次曰女英共ニ善琴瑟

堯以二女要帝舜ニ令聽内舜心弥謹不失夫婦之
礼舜崩二女哀哭其涙染竹二女死葬湘水後人立
廟祭之云今の世乃世ゝ竹を二女の涙乃湘浦の竹
にうつして色めくりし跡ゝ迄文字と畢のぬかて
涙の面ゝ常盤ゝ常盤ゝ竹も色うつり年ぬり法世
乃理と説してあられ世中ゝいろ世時ハ身をしり法
雨よ涙乃ふり異流多不用

浪洗石苔

豆殿川山ゝ法法のちゝゝ
白波ゝうゝれてもゝ毎ゝ絵のゝ紙をして法よ
消されぬを磨ゝ石苔ゝ地方ゝ

高山待月

ひえのゝ山ゝ所ゝ
比叡山を四明山ゝ云ゝ天台智者大師乃修
法師ハ四明の金氏ゝ云ゝ第十七祖の法智ゝ者ゝ法
の人ゝ故ゝ日本ゝ
教の向月二十七ヶ条と易ゝ示ゝ法ゝ別して
通周乃義ゝ故ゝ暦山ゝ
りゝ山ゝ西ゝ
月ゝ入ゝ
く法ゝ

山中滝水

ゝ

伊勢物語に播磨に布引の滝をいふ所に長さ二十丈廣
さ五丈ばかりなる石の面をつたひ岩根はしる色
らんかうにてなんあるもろこしにも廬山の中
のなかの音のことは書つらねたる所にぞ
ぞあるらん白玉は

河水流清

秋のあさぎりの清き河の水の白玉は本来もろかりけり

清きかはらの秋なりとなくみかの原の清きさとにすまゝ
ゝ

ゝ

春秋野遊

桜散り野の霞も雲をかすめ山松吹しの色
正吉云初夏の事を引き正月に野遊は二月花

の時ましてとよしと云百番に委くしるせり秋の野
遊に撰出して始終野人飯と人出くわそびとく
年中行事に見えたり

関路行客

ゆく人の乃かくれもあづかるく春を吹なつしひそ関の山風
正吉云関しづりの名とはいとどそ云い相坂と云所に
関戸をさそひし人の出ゆくに有明の月れの秋の中山
此歌上の関とつゝき相坂関く坂東乃名所見えり
撰しり人の歌を出ぞして我一人小夜の中しぬるく
ものゝ如くに月に向く物思ふ人の小夜の中山
なり河ちの小夜の中山とよむ人いさやの中山と
よむ人関所なり東海の方に

旅人のまよひ物とて方の小枝れ中に今日ら越ちん
客の字と文選より旅と訓む彼客客客ゆくるん
文集より信乃字遊仙窟より記念の字古今八
雛別り毛不知よるん人不知の字に
わらびて初ゆく袖の白雪と書る形とはくそでゆく
これを出所として家を信といふ勸君更盡一盃
酒西出陽関無故人この詩を異國ていこそび信て
旅客に酒を進むるを陽関三疊の曲と号る日
本にて相坂乃関送りのんちり

山家夕嵐

夕ゆふ陽ひの字方の字未代山にせてとまちうく栗の神垣
ちりはくれ秋乃字未のちわれいむ山風と嵐といふん

世にすて字未のちわうく山風にて嵐の字をちりは
ち栗の神垣ひらく垣ちりう乃嵐乃於ちり

山家人稀

面々を思ふ人やうくんにくもとられぬ若乃枝
山の奥へ引籠まとも元の故郷をさい忘ぬ人の
材を若乃道ようを孟く音信を待ども来れも
問めくに相もいはうとれとも正古之志の人の字は
塩思ちり故郷を云くく行ふ人をば浪さどと
塩ひをして塩思乃はれ人う世稀とば浪した
ふ於ちり

海路眺望　眺ハ望之意也の住と眺也

志ほちやうちやうふ字の海ちうちゆう小路のりうの字式

上の八源氏物語に奏でたまふ源氏君の琴の琴
のことなり筑前国志賀帥の娘の五節といつるあり
又大貳任国ふけるくらゐ任てくだりしが今任つてくだるとて
の五節も又つゐに具して筑前より中国にくだる
浦のあとを通りて

琴ひきふひさかたの源氏の縄ゆゑ公君をとめ
源氏君の琴の音を毎日聞て又なれ聞てあり百集
の猫鶯くらもりのとしをぐらしたりきにしめ
せくい初てあの乱れたりもあらぬ乱れくる源氏の夜に
ものあるてひきさけ緒乃ものたてぬ乱れたりもあらぬ
ものあるべ夜の命の留まる絃くしけ二首とんくとなり大
記なれくも帥くとなり帥ハ親王のあり官あり

の帥を金くく史勢くさみ帥ハ河内大貳が
帥の代官をなる所の帥も大貳もなくなりトるハ備
前国乃名所の思浦をとなる所拾集に
浦間なる足ゆゑ山の浦梅ひさくなりぬ君の山ハ
世界の下なるくく源氏君のあくぬるれ久しきとい
くくくして小浦のなりなれ乱れいなり正去云ものの幸
乃名をば非人なる所ものくくなるまくくなるまくくなる知りて
ばくある乱なりあの波乃ふ乱の路乃字あくく
なの名を知くく今浦なるよあの名ぐくなる乱くく

月羇中友

夕陽東宮なり初くくなるくくなる有明乃友くなるくく
七日月をを夕月東くくなる羇くハ志くくなる橋の名なり

夕月のはるかなるあなたまでうつくしく美しく月を俤
神なり友とまたれて後こいまるれうる友乃ゆうかた迄
これい羇旅の所く後拾集乃雜部よ神祇釈
教述懐懷旧なぐさを入くうるもその例なるべし

旅宿夜雨

旅ごろもぬくやまの松よりもれ来る雨は神よりもたれ来る雨はなつ
けぬ乃ゆうと神よ夢ゆめ四吉云濃神濃神といふ
ゆうとふこと俗のふるさとのびくうるうちふ
初の一るゆうはとべ碑ゆうといつく所のふる旅宿
乃雨の必へきなれ云ゆ
故郷に有毋秋風涙。旅館に人暮雨魂　樂天

海辺暁雲

明めそ海ゆ出る友毋れ星の海ぐれり雲ぐ乃ゆ
雲で別ゆくい東引布ミ毋ゆ星を見ゆく秋のあくはも
何時ゆも知ゆく毋氏出ゆ物ゆり明方の星ハ見ゆ
を横ゆ引てあゆふと知ゆくあを出ゆ事ゆり物
さびあゆれふゆ四吉云星の海ぐれハ雨ゆ暁ゆふ
あり雨ゆハ次第ゆ多濃ゆく毋乃月ゆの星海ぐる
ふゆり明方ハ一ゆく消ゆく失ゆ故ゆ海ゆうゆり

寄夢恋常

海ぐろあばいやゆろれゆる夢ゆ中ゆ月ハいく秋ゆて見ゆ秋ゆ
撰集よハ恋常と雜の中ゆへくあり雜といふハ万事
よりゆろゆゆり連歌よハ恋常と懐旧とハ述懐乃
内ゆり用ゆ

信濃国
[illegible]の夢とそうれ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
一息間ごとに大夢ハ[illegible]夢より世をもさ
[illegible]覚め[illegible]とハ[illegible]
未得真覚恒所夢中設佛説為生死長夜[illegible]
この文乃ち[illegible]

[illegible]とハ悟ふ[illegible]
世とハ[illegible]ハ皆夢ちり死生乃空[illegible]
[illegible]を真の覚[illegible]
[illegible]ハ真[illegible]

一遍上人

寄草に述懐

[illegible]

新古今十九巻神祇部に後成

[illegible]

[illegible]の[illegible]ハ後成乃[illegible]
[illegible]辣[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
成乃和[illegible]
理[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
ハ[illegible]
述懐の[illegible]辣ハ[illegible]

草部より繡(ツタ)あり又棘(ミチ)の路とゝむハ公卿の名ゝとゝあり又
蘆汐草の木より初より刺棘(ムバラ)とへる字あり異流多不用
續後撰九神祇の部に小野宮より皇大后宮大夫後成昔
述懐部より春日野乃井ぐゝ乃道の埋ぬ一ゝとゝ
ゝ乃武蔵中納言ゝ家ゝ歌ゝ小参議より任ぜられて
侍し朝かの部とゝ出ゝく悦申ゝゝとゝて前大政大臣
ゝ一の井ゝ乃井路のゝゝ乃武ゝ乃ゝゝて神乃志ゝとゝ
寄木述懐
九条の外藤(トノエ)の樗(アフチ)ゝとゝ乃れより六年乃夏ゝゝ乃ゝゝて
外藤(トノエ)ハ文門乃外と称し国と左藤門府左衛
右兵衛これゝゝを藤(フジエ)ハゝゝゝ乃ゝゝ文門の内
をゝ後ゝと左を藤府ゝゝ右を藤府ゝゝ大将中将少

将右豈右曹ゝゝ乃ゝ宿直(トノイ)ゝ乃ゝ藤(フジエ)ゝ宿直(トノイ)ゝゝ
名別ゝゝ藤(フジエ)ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
約束
ふきれぐゝ伝の契ゝ九条れゝゝ乃れゝゝ乃ゝゝ
夫木集夏部
藤(フジエ)の垣(トノエ)ゝ藤(フジエ)ゝゝゝ垣(アフチ)ゝ下蹈(ミチ)ゝ
右を樗花をのさくゝれゝゝ乃ゝ藤(トノエ)ゝゝ樗(アフチ)ゝ樗(ハ)ゝ
良材ゝゝ自分ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ分ゝゝ樗ゝゝれゝゝ
逐日懐舊
天戸のゝ春日毎ゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝ
天戸ゝゝ大空ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ハ毎日といふ事なり文字ハ天地の始をおもひ出すまゝ
ど神代乃始をさしてねむりしかれど立かへるさとに之

祝歌祝言

祝ふより祢もさらにそハ稀なる君あるとき小民ゆたかにしてハ
賀への下にも祝文君が代の久しきよしあり雑部に賀へ
ところ祝ところ歌あり毛詩六義に頌ハ誦也容也
頌美盛徳形容以其成功告神明云し此意之六義
の中にハ頌の哥と佛神にも道理にかなひし哥
事にと祝也ハ感應あり非義の祝ハ不叶也

正吉抄云此百首ハ九大臣基家卿乃作によりて老後に
よみ給ひし文字鎖そ抄にハ侍てハ出来らぬ鎖を出る
にて歌まてあるく為家卿のいへる題但百首にハ悉く秀
逸をバよみねものなる地哥をも交ふ物之殊に点の哥ハ
雑題を連べバ源氏にかゝりてよみたる源氏を見侍り
三あり詞をとる又源氏のうすを併みて源氏とは
見えてよむハ上手の志わざなり六百番の哥合に源氏（冬部枯野題千首歌）
見ざる哥人ハ遺恨乃事之と俊成乃判の詞あり
かなり三十一字に理を尽すハ下品なり一首
外理をあらはさぬのやうにむかしハ上品之尽くとあ
らはるといふ歌を不言俊成哥に
故なよひとりも月をこゝろはせられ抄に於ヒをあにせひん

貫之が哥に

我ながさめしは流さしなや抄く樒山寄りて陰月とぞ
定治卷云松風をぎしく更行まくれ姨捨山の月をみ
のかりて中君乃向をおくさめ無ほと承言なき哥に
こいつをさりかくのでき數多し和哥に六乃句法あ
つき親句疎句乱句對句畳句隣句なり畳句とハ重る
乃てなり

御堂関白五世
忠通
法性寺関白

大政大臣 九條殿
兼實
後法性寺入道 月輪関白

慈鎮

二男
良經
後京極摂政

基家
月輪ト云 内大臣正二位 号ス鶴殿

右百首周桂抄ハ三條西殿逍遥院入道堯空よりの相傳也紫屋宗長抄月村斎宗碩抄兼載抄ハ自然斎宗祇よりの傳受なり木戸忘吉抄以上五部一覧して其中是と似く非なる異説又無用の古語古哥などを多きハ除て任師説而相傳之正統誌之畢

干時元和五年孟夏

洛陽黄臺山住沼野釋切臨曳書之

正德三年
孟陬吉旦
出雲寺和泉掾
京師三條通外屋町
江戸日本橋南一町目